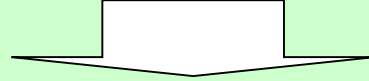


日本の発達心理学の現況と課題

遠藤 利彦
(東京大学)

Developmental psychology.



From the cradle to the grave.

Life-span Developmental Psychology

1980～ スローガンから現実へ

- 日本の発達心理学の30余年

→生涯発達心理学の実質的展開

- かつて「発達」という視点からは必ずしも考究されることがなかったトピックも含め、様々な人生ステージの諸問題が「生涯発達」という術語のもとに整理・統合されつつある

- 研究の質に関しては様々な課題
 - e.g. 青年期研究における理論的閉塞状況
 - 日本固有のindigenous developmental psychology？
- 少なくとも研究の量のみに関して言えば
若年成人期など一部の発達期を除き
研究の空白期はほぼなくなりつつある
- 乳幼児期の発達に対する実験的アプローチや
超高齢期も含めた老年期研究等の相対的充実

- しかし、単にターゲットとする人生時間の延長や空白期の消失が本来、生涯発達心理学が目指すところのすべてではないはず（生涯発達心理学は各発達期研究の寄せ集めではないはず）
- Baltesの基本的方向付けに回帰して現況を見る
発達心理学が真に「発達の」であるためには
何が必要か？→真正面から時間的変化を追う

The description, explanation, modification
of

within-individual change / stability
from birth to death

and

between-individual differences / similarities
in within-individual changes.

(e.g. Baltes et al., 1980)

① 個人「内」の変化・連続性の把握

② そのパターンの個人「間」差の解明

③ 発達の軌道修正・最適化

①個人内の変化・連続性の把握は進んでいるか？

→それぞれの発達時「点」での集団としてのデータの蓄積は確実に進んでいる

- しかし、個人内の発達時間の流れという「線」を長期に亘って地道に辿るという試みは乏しい
- そもそも複数の発達期にまたがった研究が稀少

- 長期縦断的コホート研究の絶対的不足
 - コスト面の障害・専門的研究機関の不足
- top-down / theory-driven的な視点の優位性
 - 効率的でスマートな「サーチライト」型研究
 - 短期的な成果主義の陥穽
- bottom-up / data-driven的な視点の見直し
 - 地道で泥臭い「バケツ」型研究
 - 何十年も継続して初めてわかることの重み
 - e.g. 糸島プロジェクト(大神, 2008)

• 世界における長期縦断研究の実際

- アタッチメントの連続性・非連続性に関する30～40年に亘る長期縦断研究(米独中心)
- 遺伝と環境の相互規定的影響・エピジェネティクス等に関する双生児研究(欧米圏中心)
- 精神障害の発生に早期経験が及ぼす影響を問う発達精神病理学的研究(e.g. Dunedin)
- 特異な歴史的状況下に置かれた特定コホートの長期追跡調査(e.g. 大恐慌)
- 子どもを取り巻く家庭内外の保育も含めた環境全般の発達の影響を問う総合型縦断研究(e.g. NICHD, EPPE) [東大Cedep]
- **Natural Experiment**: 非定型的な養育環境に置かれた剥奪児に関する縦断研究(e.g. BEIP)
- **Experiment**: 特定の早期介入の長期的効果の検証を目的にした追跡研究(e.g. Perry, Abecedarian……) etc.

- 日本における縦断調査
- 川崎プロジェクト
- ベネッセ・家庭教育縦断調査
- 慶應義塾大学・日本こどもパネル調査
- JST・すくすくコホート縦断調査 Japan Children's Study (JCS)
- 保育コホート研究
- 子どもに良い放送プロジェクト
- 子どもの健康と環境に関する全国調査 (エコチル調査)
The Japan Environment and Children's Study (JECS)
- 21世紀出生児縦断調査 etc.

②個人間の異同性の解明は進んでいるか？

normative componentへの関心の優位性

individual componentへの関心の相対的不足

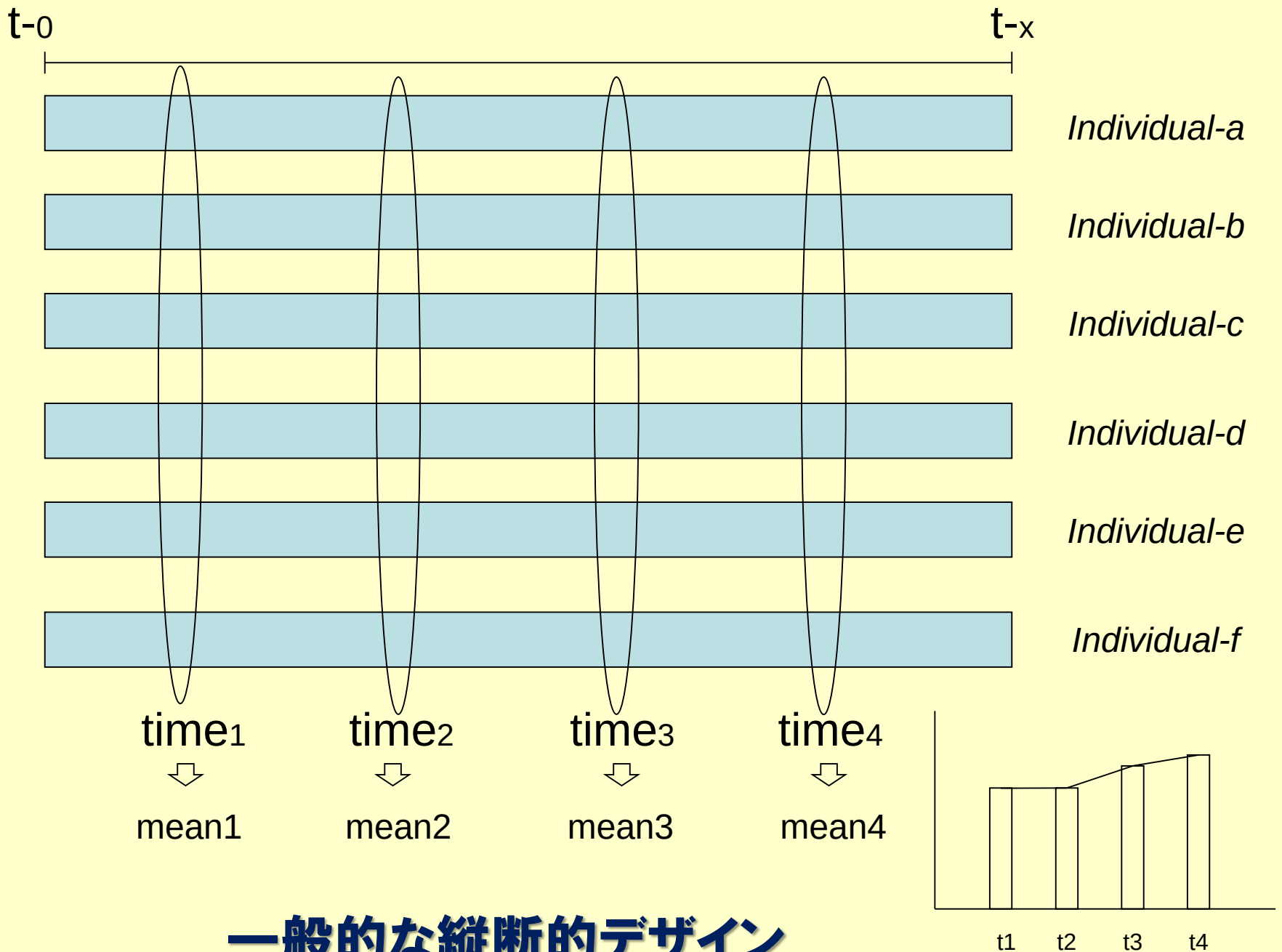
「点」での個人差は問題にされても

「線」に現れる個人差はあまり考慮されない

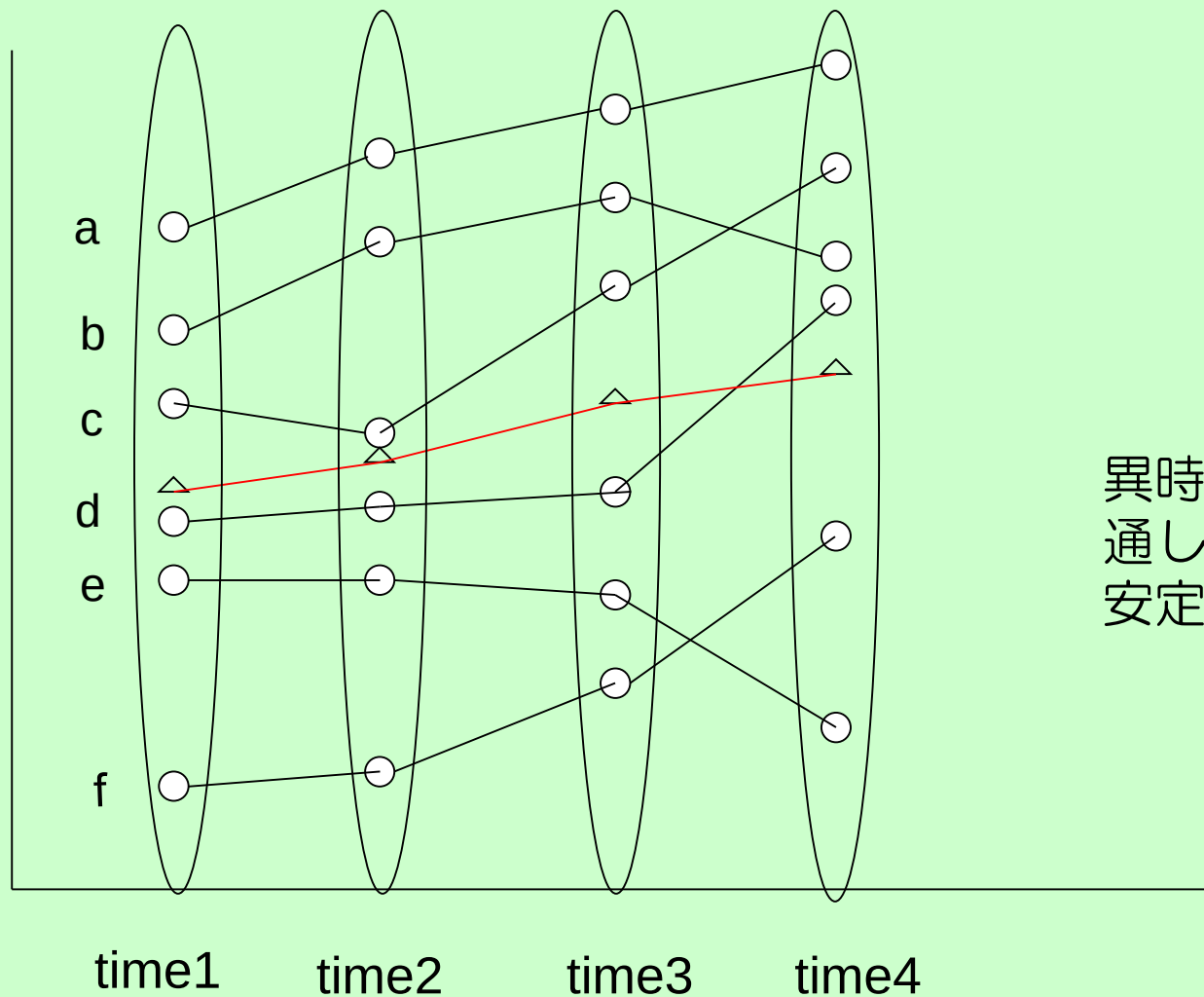
- 点をつなぐ方法

- 異時点それぞれの集団代表値をつなぐ
→標準的な発達曲線を仮構

- 個人差分散(rank-order)の異時点間相関
同種スコア → 個人特性の安定性を仮構
異種スコア → 標準的な発達機序を仮構



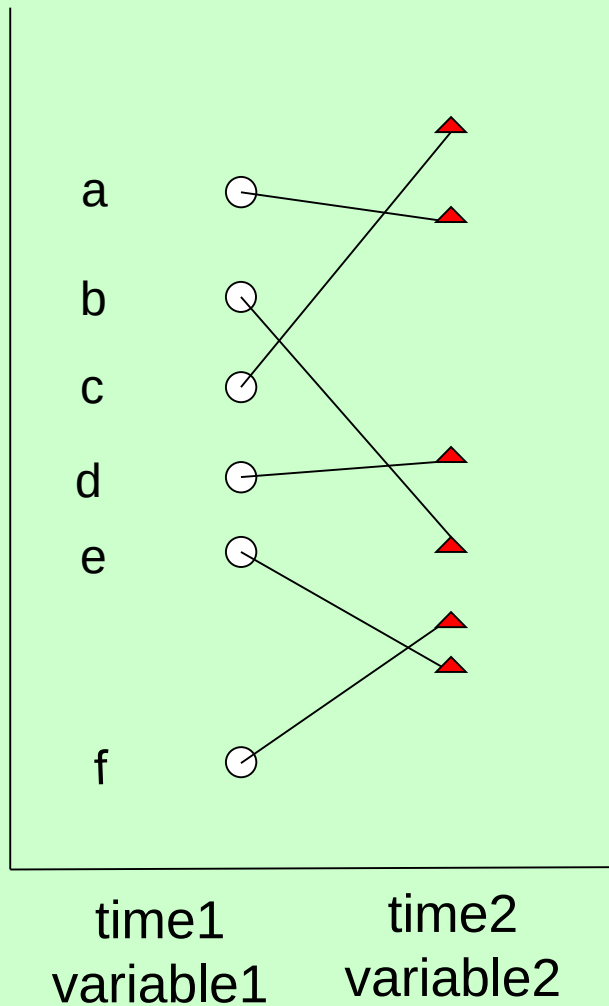
一般的な縦断的デザイン



異時点間相関を
通して個人差の
安定性を知る

一般的な縦断的デザイン

集団内順位の変動



variable1-variable2
correlation

相関が高い場合、variable1は
variable2の先行規定因の候補と
見なされる→発達機序の推定

- 従来の方法→「一つの標準」に収束しがち
- 「もう一つの発達」の可能性を探る
- 「線」(発達パターン)の複数性・多様性
- 仮に同じ到達点(等至点)でも、異なるプロセス(順序性)や異なるメカニズムはないのか？
- 「線」の個性記述を通して、法則定立へ
- たった「一つの標準」や、そこから逸脱した例外的な「異型」を見出すということではなく、複数の「定型」を見出すことに主眼をおく

③発達の軌道修正・最適化の試みは？

practiceは着実に増えつつあるが

praxis(理論に基づく実践)はどうか？

→実践仕様にアレンジされたリアリティある理論

(1)「線」単位での発達の知見

(2)中程度にローカルで半具象的なセオリー

(3)「主観性」への踏み込み

- 基礎と実践／理論と応用

→ 有機的連携／表裏一体性……

- 「理念」と「現実」の間に横たわる深い溝頭ではわかっているけど……つながらない
- 架橋を阻む微妙な齟齬
- 「使用言語」(ジャーゴン・暗黙知・発達観)
- 「目標設定」(「今ここ」と「いずれ」「将来」)
- 「エビデンス観」(「変化」を実感させるもの)
- 「志向性」(変数志向 vs. 個人／主体志向)
- 「当事者性」(責任・持続性・文脈依存性) etc.